

「白いトルコ桔梗の

花束を持った赤いフードの女」

小宮山　とう子

「由起子ばあば。私。彩海」

青葉が目染む初夏。爽やかな風が網戸を抜けて入り書斎の中で踊る。築四十年にはなろうという二階家のひとり主となつてすでに二十年になる。

主の押木由起子の夫、直輝は六十歳の定年と同時に癌が見つかりその一年後には旅だつて逝つた。

「これからの人生を由起子と二人でのんびりと過したい。週の半分は健康維持のためにパート勤めをしながら小説を書いたり由起子と旅行をしたり。その前に人間ドックで健康チェックだ。勿論、由起子も」

二部とはいえ上場会社の執行役員の肩書きを持った直輝には、傍系会社への天下りの道もあったがそれを蹴つた。由起子と過す時間を優先するための選択だつた。

「奥様には特に留意するほどのことは有りませんが、ご主人には肝臓に深刻な問題が懸念されます。精密検

査をしますので検査入院をもう一日していただきます」

医師の顔は深刻度が高いと言っているのも同じだった。一泊二日の予定のドックではあったが直輝だけがさらに一泊の追加になった。

軽い気持ちで受けた人間ドック。一泊二日の予定が結果として肝細胞癌が見つかり療養生活が始まった。

入院と同時に急速に衰え始めた体力。医師のほからいで時には自宅にも帰つては来たが一編の小説を仕上げるほどの気力も無ければ由起子と共に小旅行さえも出来るほどの体力は残っていなかった。

あれから二十年、由起子は直輝のお気に入りだった書斎にこもつては直輝に代わつて小説を書くようになっていた。構想に行き詰まると机の引き出しを開けては直輝の使っていた原稿用紙と太い万年筆に助けを求めめるかのように語りかけた。そして書かなければ自分奮い立たせるかのようにパソコンのキーを叩いていた。

「由起子ばあば。私。彩海」

玄関からの二度目のチャイムの呼びかけに由起子が腰を上げた。

「あら、いらつしやい。彩海ちゃん一人？」

内鍵を外し、亀甲模様ガラスの入った格子戸を開けた由起子の顔に笑みが溢れる。

「留守なのかと思った。二回もチャイムを鳴らしたのよ」

彩海が不満そうに口をとがらすものの瞳が笑っている。

「ごめんなさい。今、新しい小説を書き始めたところなの。それより彩海ちゃんの鼻は天下一品ね」

「そうよ、私の鼻はグッドなのよ。で、なに？ 美味しい物が有るってことよね？」

由起子にはひいきのケーキ屋があった。二人の娘たちの就学前にはと根岸線の洋光台に家を建て、横浜から越してきたのが四十年前。そのころはまだのどかな田園風景が残っていた。が、二歳違いの娘二人を嫁がせる頃には駅前の開発が進み、住宅で埋め尽くされていた。よほど腕に自信があったのか駅前の商店街から少し離れた場所のケーキ屋。フランスで修行を積んだというパテシエの主人の頭も今となってはすっかりと白くなっている。由起子は月に数度、この店のドアを開ける。

「押木さん、いつもありがとうございます。一個でもいいんですよ」

時代に取り残されたかのようなケーキ屋。

「私一代のケーキ屋です」

跡継ぎに恵まれなかったのか主人が口にしたことがあった。

終わらせてしまうにはもったいないほどに洗練されたケーキがショーケースに並んでいる。若い店員を雇い入れるでもなく夫婦二人で営む小さなケーキ屋ではあったが評判のケーキ屋でもあった。由起子はいつも一個だけではと三種類のショートケーキを買っては二個を冷凍庫に入れていた。もちろん多少の味落ちは覚悟しなければならぬが、それでもお茶請けとしての役割は大量生産のケーキに比べれば数段も上をいつていた。

「イチゴと栗とショコラ。彩海ちゃんは何れ？」

「やったあー。ブラン・シャポーのショートケーキね」

ブラン・シャポーとはフランス語で白い帽子との意味らしい。パテシエの主人が誇らしげにかぶっている帽子を冠にしたと照れながら口にしていたのを由起子は覚えていた。

「紅茶でいい？ 書齋で待ってて。いま入れるから」

「はい。ヌワエリヤね」

セイロン島の中央で採れる紅茶ヌワエリヤ。オレン

ジ色の爽やかな香りとしっかりした紅茶の味。だからといってショートケーキの美味しさを損なうことはない。直輝と由起子が最も好んだ銘柄だった。

「由起子ばあば、今度の小説のタイトル、『白いトルコ桔梗の花束を持った赤いフードの女』っていうの？」

由起子が書齋に入ると彩海は腰をかかめて電源が入ったままのノートパソコンの画面に見入っていた。

「そうよ」

由起子が自慢げに応える。由起子が小説を書き始めたのは直輝が他界して『これからは独りで生きてゆかなければならないのね』と仏壇の遺影に語りかけたとき、『待ってやるから小説でも書きながら残りの人生をのんびり暮らせ』と返事を返してきた。すくなくとも由起子にはそう聞こえた。そしてその翌週にはパソコン教室に通い、扱い方を一月ほど掛けてマスターした。

「パソコンを使うことが出来なければ一年と続くことなく小説など書いてはいなかったと思う」

地元の文芸同人会の会員が集まる合評会で何度も口にしてる由起子。三ヶ月ごとに発刊される同人誌に欠かすことなく投稿して十三年が過ぎた。

「まだタイトルだけなの？ それでどんなストーリー

ー？」

「久し振りに推理小説を書いてみようと思っ

ているの」

「すごい。それで……？」

「だから、どんな事件？ 殺人事件を若いイケメン刑事が謎解き？ それともベテラン刑事？ いや、女刑事？ 密室殺人に交換殺人」

推理小説と聞いて彩海の好奇心が踊った。

「それは内緒よ。次に彩海ちゃんが来るまでには書き上げられるかしら」

今は構想を練ることに気持ちを高ぶらせている由起子。パソコンのタイトルを見入っては視線を天井や窓の外に向け、たむろする断片的な映像を拾い集める。そしてパッチワークのように縫い合わせてゆく。色々な色彩や模様のキルトがベッドカバーほどの大きさにならない限りはパソコンのキーを打つことはしない。少なくとも一週間は書齋の机の前にそんな日々が続く。そして何かに取り憑かれたかのようにパソコンのキーを連打する。ストーリーテラーの神様が由起子の背中を押すのかも知れない。由起子は直輝が押しつけてくるのだと信じていた。

「じゃあ、一ヶ月ほどしたら来るから」

彩海が二個目のショートケーキを口にしながらから微笑む。

「一ヶ月じゃあまだ見せられないわ。やっと書き上がるぐらいよ。そうね、推敲まで入れると一ヶ月半はかかるかな」

「いいの、月が変わったらまた来る。由起子ばあばがパソコンに向かっていてのを見てるだけで私も元気が湧いてくるから」

「そう、ならいいわよ。来る前に電話してね。ショートケーキを買っておくから」

「二個ね」

「わかりました。イチゴとモンブランね。ー、それで今日は？ 何かあったの？」

「ううんー。何も、お母さんに由起子ばあばの様子を見てきてって頼まれたから。私も由起子ばあばの顔が見たかったし……」

「そう、ありがとう。このとおり元気よ」

『白いトルコ桔梗の花束を持った赤いフードの女』

事件は春の陽気に誘われ、桜の名所はどこも賑わいを見せているさなかに起きた。

「課長、被害者がソファーに座って花を花瓶に生けているときに後ろから紐状の物で首を締め上げたようです」

四月三日、月曜日の午後、一時から二時の間に殺害されたと思われる若い女性の絞殺死体が発見された。昨日に続き、今日も無断欠勤をした被害者。心配した会社の同僚が鍵の掛かっていたいなかった部屋を訪れ、変わり果てた被害者を発見したものだ。

十畳はあろうかと思われるリビングのテーブルの上から絨毯にかけて白いトルコ桔梗が散乱している。その直ぐ脇に二十六、七と思われるショートカットの女が天井をにらみつけて息絶えていた。息を止められる苦しさに必死に抵抗したのか首筋には無数の爪の跡が診て取れる。いわゆる吉川線だ。犯人は被害者が息絶えたところで手を緩めその場を立ち去ったのか被害者はソファーの上に崩れ落ちたかのように横たわっている。

「このマンションには誰でもが侵入できるわけではない。エントランスに設けられたインターホンで住人を呼び出すかマスターナンバーを入力する以外にエレベ

「ターへと通じる入口のドアは開かない。容疑者は限られる。先ずはその洗い出しと近所の聞き込み。さらにこの白いトルコ桔梗を誰が持ってきたのかだ。十七時に捜査会議を始める。それまでに多くの情報をかき集める。武井、おまえはエントランスの防犯カメラに写った人物を整理しろ」

横浜中央警察署刑事課々長の高瀬耕太郎警部が檄を飛ばす。

十六時半を過ぎたあたりから捜査員が捜査を終え、成果の報告をと会議室に集まりだした。

「起立、礼。今から『リバーサイド有園』女性住人殺人事件における捜査会議を始める」

捜査課係長、高橋幸夫警部補の進行によって会議は始まった。会議室の正面には、この世への未練と犯人への憎しみを込めた視線を天井に投げる被害者がソファアーに横たわっている映像が映し出されていた

「賃貸マンション『リバーサイド有園』三階のA室、宮原美保、会社事務員二十九歳独身。このマンションに入居して三年目だそうです。死因は紐状のもので被害者がソファアーに座りながら白いトルコ桔梗を花瓶に生けていた際に後ろから犯人によって締め上げられたものです。犯行時刻は四月三日の午後一時から二時の

間。凶器の発見にはいたっていません」

「第一発見者は同僚の今野あすか三十歳。これまでに無断欠勤などしたことのない被害者を心配し、上司の許可を得てマンションを訪れたとのこと。もつともセキュリティに阻まれ何度も携帯で被害者に連絡を入れても応答がなくなりましたものかと困っていたときにマンションの住人が帰宅し、事情を話してマンション内に入つての発見でした」

「被害者の交友関係ですが同性の友達は何人かいたようですが特別に仲の良い男友達は聞いたことが無いとのことでした」

誰が指示することもなく刑事達は次々に自分の知り得たことを報告するために起立しては声を発した。

「事件現場からいくつかの指紋を採取しましたが被害者以外の指紋については少なくとも一ヶ月以上は経過したものばかりで、ここ最近での訪問者はいなかったものと思われず。特に拭き取られたと思われる痕跡もありません。トルコ桔梗の包装紙からは被害者の指紋の他にもう一人の指紋が残っていました。鑑識の結果では特に真犯人に繋がるものは発見にいたっておりません」

「近所の聞き込み及びマンションの住人による聞き込みにおいても特に報告出来るようなことは今のところ有りません」

「武井、エントランスの防犯カメラで何か発見できたのか？」

特に犯人に繋がる手掛かりや発見の報告が無いことに係長の高橋警部補が苛立ちを隠すことなく武井刑事に報告を促した。

武井由美子巡査は刑事課ただ一人の女刑事だった。交通課から刑事に抜擢されて三年目を迎える。

「昨日朝八時より事件の発覚までの今日の十五時までにこのマンションに入りました人物について一覧にした資料をご確認ください」

捜査会議の進行をフォローする総務課の巡査数人が急いで資料を各捜査員に配る。資料には出入りする人物の時間と氏名が記載されていた。

「資料を見て頂くとわかりますが、マンション住人の出入りの時間からは特に不自然さは感じられません。

また訪問者において宅配と電気メーターの確認と思われる人物が合わせて四人ありましたが、これも不自然さは認められないかと。住人以外の訪問者はただ一人」

武井刑事が資料から目を大型液晶画面へと移す瞬間

を捉えるかのように総務課の巡査が白いトルコ桔梗の花束を持つ赤いフード付きのコートを着た女を映し出した。

「おおう」

捜査会議室の中にとよめきが起きた。

「防犯カメラのCDを見て頂いたとおり顔についてはサングラスとマスクその上に手袋。定かではありませんが女性と思われる人物が犯行時刻と思われる昨日の午後一時五分にマンションを訪れています。エントランスに設置されたインターホンのキーを操作していることから被害者とは知り合いかと思われます。それも躊躇することなくキーを押していることから初めての訪問とも思えません」

「おい、近所の聞き込みでこの赤いフードの女の目撃証言はとれなかったのか？」

会議室内の捜査員達がお互いの顔を見合わせてはみたものの誰からも赤いフードの女の情報が発せられることは無かった。

「この白いトルコ桔梗の花束を持った赤いフードの女はセキュリティを解除して被害者の部屋を訪ねてから二十五分後にはこのマンションを出ています」

「よし、明日の朝一番からマンション周辺二キロ範囲

のコンビニ、其の他の防犯カメラを徹底的に確認しろ。合わせて被害者の交友関係もだ。それと花屋を当たれ。白いトルコ桔梗の花束だ。きっと店員が覚えていいるはずだ」

真犯人はこの赤いフードの女で有ることは疑いようのない状況とばかりに高瀬刑事課々長より捜査本部の方針が示され、会議は解散となった。

事件が発覚して一週間が過ぎたが何の進展も得られなかった。赤いフードの女はどこから殺害現場のマンションに来て、何処に向かったのか、何らの情報を得ることも出来なかった。交友関係についても特に事件に関係しそうな名前も挙がってはこない。しかし、被害者を解剖した医師の所見に習慣的な性行为が診て取れるとあった。会社の同僚への聞き取り捜査ではそんな影さえも浮かんでいない。よほど秘密にしなければならぬ理由があったのかもしれない。また、被害者の両親は既に他界し兄弟もいない。亡骸の引き取り先を探したものの、何年も行き来はないとの理由で二人の伯母からも断わられ、やむなく無縁仏として葬られることになった。

「何をやっているんだ！ どうして何の報告も上がらない！ 赤いフードの女に繋がる情報は！ 白いトル

コ桔梗を売った花屋もまだ見つからないのか！ 関係のあった男は！」

事件が発覚して十日目、高橋警部補が顔を赤くして捜査会議室の空気を激しくかき回す。

「高橋警部補。赤いフードで容姿を隠した真犯人と思われる人物を女と限定することに疑問が……。それとセキリュティを容易に解除出来るのが被害者と親しい人物と決めつけるのは……」

捜査員の誰もが何も発しない空気にいたたまれないとばかりに武井刑事が手を挙げ、指名を待つこと無く口を開いた。

「どうした、武井。何が言いたい。ハッキリと言ってみる。女だからといって遠慮するな」

高橋警部補は、口では遠慮するなど言ってはいるものの女性蔑視の癖があった。犯人はもとより容疑やその関係者など捜査の都合上、どうしても女でなければ出来ないこともあり、補完的な役割として女刑事を配しているに過ぎなかった。

「確かに胸元が膨らんではいませんが、体格もガッシリしており身長も百七十はあると思われまます。足下の靴もスニーカーであることから女装かも知れませんが。セキリュティについてもマンションの住人なら何の問題も

無く解除できません。それといかに後ろからとはいえ若い女が必死に抵抗するなかでの絞殺にはかなりの体力が必要になります。もちろん女性であっても不可能ではありませんが……」

「わかった。明日の朝からマンシヨンの住人全員に殺害時刻のアリバイを確認しろ。特に百七十前後の身長
の男と女の裏は徹底的に確認しろ。花屋の捜査範囲をもっと広げろ。それと、近所の聞き込みをもう一度徹底的にやれ。明後日の十七時に捜査会議だ。いいか、真犯人に近づく情報を何としても取ってくるんだ」
何の成果も無くこの日の捜査会議も終り、捜査員達は疲れ切った表情を見せ始めていた。

「武井」

高橋警部補が出口に向かう武井刑事を呼び止めた。

「はい」

「おまえの女の勘が正しければ、赤いフードの女、いや、男かもしれないがそいつがマンシヨンに入る前に出て、そいつが立ち去った後に帰宅した住人ということになる。もう一度あの一覧表からその住人を割り出せ」

「それなら既にわかっています。該当者は十三人。さらに身長を考慮すれば四人に絞れます。すべて男性です」

「何でそれを会議の時に言わないんだ」

「まだ、決めつけてしまうには早いかと……。それにもしそうだとすれば真犯人はかなり用意周到な計画を練りに練っての犯行になります。当然のように防犯カメラも意識しての変装でしょうし、マンシヨンの周りにおける防犯カメラさえもチェックしての計画」

「もういい、わかった。おまえの勘を信じよう。四人の容疑者には誰も触れさせせん。おまえの思うとおりにやってみろ」

「わかりました。ありがとうございます」

武井刑事は深々と腰を折って高橋警部補に頭を下げ、会議室の出口に再び向かった。

「ちよっと待て。武井、女のおまえに聞く。被害者はなぜ男の影を周りに隠したと思う？」

高橋警部補にはわからなかった。天涯孤独とも言える被害者。うら若い女性であり、美人の部類に入れておかしくはない。同性からの評判もけて悪くなく明るい性格だったらしい。それなのに親密な関係にある男の存在をなぜ隠さなければならぬのか。

「それは、私にもわかりません。気恥ずかしかったのか、同僚にも知られてはまずい相手だったのか……」

「社内不倫の相手ということか」

「いえ、単なる可能性だけの話です。ただ、自分の部屋には招き入れていないということが気になります。常に相手の住まいかホテルを利用しては……。男性の方に用心深さとか何か意図的なものを感じます。普通なら、相手の部屋を覗いてみたいという心情に駆られるような気がするのですが……」

「被害者が拒んでいたということもある」

「確かにその可能性もありますが……。身寄りが無ければ無いほど、誰かを招き入れてお茶を飲んだり食事を振る舞ったりして団らんを求めるような気がするのですが……。ましてや男性とは結婚も視野に入れていたでしょうし。行きつけの美容院があればひよつとして口を滑らすことも……」

「わかった。男については他の者にもう一度徹底的に洗わせる。おまえは四人の住人についてシロカクロカをハッキリさせろ」

翌朝、武井刑事は万年平刑事の安達礼次郎巡查部長とリバーサイド有園へと向かった。安達刑事は来年の春には定年を迎える。巡查部長として刑事課の名ばかりの主任を務めていた。刑事課の全ては高橋警部補が係長として高瀬刑事課々長の下、全てを取り仕切っていた。安達刑事は、高校を出てから四十年以上を警察

官として交番勤務を皮切りに、交通課、地域課でのパトカー勤務、留置管理課、生活安全課を渡り歩き、その経験を見込まれたの刑事課。配属二十五年の経験を持つベテラン刑事だった。定年での退官を三年後に控えた一昨年、武井刑事の教育係としてコンビを組んでいた。

「武井、おまえはもう一人前だな。女刑事を軽く見ていた係長から特命を受けるなんぞ」

「特命だなんてそんな……。私はただ自分の思ったことを……」

「そこだ。それが重要なんだ。勘なんてそんなに働くものでもないし、滅多に当たらない。それでも刑事は自分の勘を信じたいと思う。だからといって、勘に頼って猛進すれば見落としが出る。だから上申して許しを得る。許可が出ればその勘に突き進む。溢れは上司が判断して他の者に拾わせる。それが組織だ」

安達刑事はことあるごとに捜査は組織でやるものであり単独での行動は危険を伴うと説いていた。そして「殉職したくなければ肝に銘じろ」と付け加えていた。二人は入口のセキュリティに訪問先の部屋番号を打ち込んだものの四人とも応答がなかった。

「そろそろよね。もう九時を少し回っているし。勤め

人なら出勤している時間よね」

「仕方ない、一人ずつ勤務先をあたるか」

「これじゃあ、一日がかりね」

武井刑事は鞆から住人の資料を見ながら、小田原、横浜、東京霞ヶ関、品川と四人が勤めている会社の所在地を確認しながらため息をついた。

「よし、行くぞ。まずは横浜、そして小田原だ」

安達刑事は、「捜査とはこんなもんだ」とばかりに武井刑事の肩を軽く叩き、先に足を踏み出した。

「申し訳ありませんお忙しいのに。もう一度、事件のことでお気づきの点をお伺いしたくて。それと大変恐縮なのですが四月三日の午後一時ごろから二時ごろまでの間、どうしておられたか教えて下さい」

被害者、宮原美保の真下、二階のA室に暮らす川村祐一の横浜港区の勤務先を訪ねた武井刑事が申し訳なそうに口にした。

「アリバイまで聞かれるのですか」

「本当に申し訳ありません。お一人、お一人を関係者リストから消していかなくてなりませんので」

「いいですよ。私は事件とは何の関係もありませんし、被害者の方のことは事件が起きて始めた知ったくらいですから。うちの会社はサービス業だから月曜日が休

日なのですが、その日は年度替わりでもあり業務が忙しく出勤していました。他にも何人かの社員が出勤していました。確認しますか？」

そう言うのと川村祐一は、事務フロアで机に向ってしきりにパソコンと格闘している三人に声を掛けた。

「間違い有りませんよ。その日は四人が休日出勤をして山積みの仕事をなんとか五時まで片付けて軽く一杯だけと呑みに行きましたから。朝から夜の八時ごろまでずっと一緒でした」

武井刑事が確認した住人の出入り時刻の一覧からも殺害された当日の二十一時を少し過ぎた時間での川村祐一がマンションに帰宅したとの記録とも一致していた。

「川村祐一は完全にシロと判断して大丈夫ですね」

小田原に向う電車の中で武井刑事は安達刑事に念を押すかのように口にして一覧表に赤い線を引いた。

小田原から東京に向う電車の中でも、港区から霞ヶ関に向う地下鉄の中でも武井刑事は同じように口にしたが赤い線を引いた。

「残るは、被害者と同じ階のD室の栗岡智樹だけですな」

「霞ヶ関か、ノンキヤリとはいえ文科省の内部局とは

「たいしたもんだ」

「しかも、大臣官房政策課の所属だそうです。具体的にどんな仕事ですかね」

「さあな、俺には検討もつかん」

二人は本庁舎の入口から受付に向かって歩きながら口にした。受付には、座っているはずの女職員は既に十七時を過ぎており当然のように誰もいない。案内表に従って守衛課を備え付けの電話を使って呼び出し、政策課へと繋げて栗岡智樹を呼び出すことになった。

「四人とも仕事持っていますので月曜日の昼間なら当然のように会社で仕事してますよね。品川勤務の大塚肇のように外回り中心の仕事だと多少の疑問は残りませんが業務日報からはシロ判断ですね」

栗岡智樹が七階から下りてくる待ち時間の合間に武井刑事が今日の捜査をまとめるように口にする。残る栗岡智樹への疑いが色濃いはずとの思いが大塚肇に対する疑念を払拭するかのようにも思えた。

「お待たせしました。こんなところまで大変ですね」

「申し訳ありませんお忙しいのに押しかけて。残業ですか？ 公務員でも大変ですね」

「刑事さん達も公務員じゃないですか。お互い様ですよ。特に年度始まりは……。で、今日はなにか？」

栗岡智樹は武井刑事と安達刑事への同情の念を笑顔に変えて口にした。職場に突然訪ねて来る刑事に訝しむ思いは有るもの、やましいことは何も無いと強調しているかのようにも思える笑顔だった。

「申し訳ありませんお忙しいのに。もう一度、事件のことでお気づきの点をお伺いしたくて。それと大変恐縮なのですが四月三日の午後一時ごろから二時ごろまでの間、どうしておられたか教えて下さい」

今日の武井刑事にとって四回目のセリフだった。

「その日は、政府の働き方改革の方針にそって年度替わりで続く残業を想定しての休日を課員が交代で取ることに……。その日、私は休みを頂いていました」

「お休みに……。そうですか、内の課長にも聞かせたんですね。働き方改革、我々公務員が率先しなくてはいけませんよね」

安達刑事の働き方改革への反応に栗岡智樹は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それで、その日はどのように？」

武井刑事が質問を続けた。

「その日は、十時過ぎに自宅を出て桜木町の横浜ブルグで映画を観てブラブラして六時ごろに帰ったかな」
「映画は何を？」

「アメリカとロシアの潜水艦がテロに巻き込まれての駆け引き。いやあ、スリリングで面白かった」

「そうですか、ありがとうございます」

「えっ、それだけでですか？」

「はい。充分です。お忙しいところ申しわけありませんでした」

武井刑事と安達刑事は急いで地下鉄の階段を下り、電車に飛び乗った。既に捜査会議が始まっている。どんなに急いでも十八時半過ぎになる。既に、栗岡智樹を訪ねる前に高橋警部補には連絡はしてあるものの気が気ではない。報告は出来ても他の刑事達の報告が生で聞くことが出来無いとすると伝わってくる臨場感が違ってくる。二人の今後の捜査に支障を来さないとも言いつれない。

「栗岡智樹の最後の言葉、『それだけですか？』ってどういう意味ですかね」

気を紛らわすかのように地下鉄に揺られながら武井刑事は安達刑事に問いかけた。

「もつと色々と聞かれると思った。映画を観ていたその証拠について聞かないのかってことかな」

「そうですね。それって拍子抜けしたってことですよね。いざれ刑事が訪ねてきてアリバイを問われる。

その時の答えを準備しているのに聞かないのか……。そういう意味ですよね」

今日の四人の中に必ず真犯人はいる。武井刑事の勘ではあったが、二人は全くのシロの判断。一人はおそらくシロ。残る一人、栗岡智樹はクロでなければならぬ。そんな思いが武井刑事の口から出たのかもしれない。

「武井、決めつけるな。明日、映画館に行つて防犯カメラの記録を見ればわかる。もしも、映画を観ていたのアリバイが崩れても単に容疑者でしか無い。詰めなければならぬ証拠が山ほど必要になる。動機もだ」

「はい。わかっています」

武井刑事と安達刑事が捜査会議室に入ると、他の捜査員たちがいくつかのグループになり、ザワつきだけが会議室に漂っていた。

「おお、ご苦労さん。今、白い花束に異様なまでに興奮を示す変質者が確保された。マンション周辺をうろついていたという証言もある。今日の会議はあと三十分遅らす」

高橋警部補の顔が真犯人はこの変質者かもしれないとばかりに高揚している。

「セキュリティナンバーはどうやって。何故、被害者

はドアを開けた。顔見知りでもない変質者が同じ部屋にいるのに何故、花瓶に白いトルコ桔梗を？」

武井刑事のつぶやきは、変質者の真犯人説は短絡的過ぎないかといわんばかりに高橋警部補や近くにいた捜査員には聞こえた。

「セキュリティナンバーは、被害者を付け狙っていた際に盗み見したのかもしれない。宅配業者を装っての侵入だって考えられる。奴が赤いフードのコートをかき取っていたのかもしれない。白いトルコ桔梗を生けていたのだからといって奴に決めつけているわけではない」

武井刑事の投げかけた疑問に明らかに訝っているかのように高橋警部補が応えた。その一つ一つがこじつけで有ることは充分に承知の上での物言いであることは、周りの捜査員達にも伝わっていた。

「高橋警部補」

変質者の取り調べを行っていた捜査員が会議室に入るなり首を横に振りながら高橋警部補の顔を見入った。

「よっし、遅くなつたが会議を始めるぞ。武井、おまえからだ」

高橋警部補は、気を取り直し、武井刑事の女の勘に期待を込めるかのよう口にした。

「はい。犯行時刻において、マンションを留守にしていた四人の住人について犯行時刻のアリバイを確認してきました。この四人と直接話をした内の二人については完全なシロと断定しました。残りの内の一人はアリバイらしきものは有りますが単に日報に記載されているだけであり、外回りを主な仕事としている事から赤いフードに変装してマンションに立ち戻ったということも考えられます。もう一人は、休暇で映画を観ていたとですが裏が取れていませんので明日映画館に向いて防犯カメラの映像確認をします」

「それで印象的にはどうなんだ」

高橋警部補が武井刑事に突っ込みを入れた。

「はい。自分的には映画を観ていたと言う栗岡智樹に疑念を抱きました。被害者とは同じ階であり誰に気づかれることなくこれまでに部屋に招き入れていたのかもしれない」

「被害者との男女関係があったかもしれないというところか？」

「いえ、それはなんとも……」

「それじゃ、映画を観ていようが観ていまいが単なる容疑者でしかない。おまえの女の勘とはそんな程度か」
「係長、自分も武井刑事と同感です。奴は妙に自信あ

りげな態度でした。何かを秘めています。防犯カメラもそうですが奴の身辺調査もやってみようかと思つています」

安達刑事が武井刑事をかばうかのよう口を開いた。「わかった。安達さんがそう思うなら脈はある。明日一日掛けて頼む。武井は明日は映画館の防犯カメラに専念しろ。次！」

高橋警部補は刑事課に配属された当時は安達刑事が教育係として何かと刑事の道を説いていた。いまは立場が逆転しているとはいえ刑事としての存在価値に一目を置いていた。

「近所の住人から犯行時間に普段は見えない赤い車が停まっていたとの情報を得ました」

「赤い車？」

「はい。目撃者の言うにはコンビニにたばこを買いに外に出ると、マンションの裏の路地に赤い車が停まっていたそうです。帰りに通った際に、急発進して走り去つたとのことでした。その時間帯が丁度、犯行の行われた時間と一致します」

「その赤い車の車種は？」

「何気なしに見た記憶でもあり赤い車としか……。ただレンタカーであったことは間違い有りません。わな

ンバーであることに『レンタカーか』と、思わず口にしたとのことは覚えていました」

「おい、変質者は車の免許を持つているのか」

「いえ、そこは……。任意を掛ける際に暴れたので公務執行妨害で押さえておりますので一晩留め置いて明日の朝からその辺を問い詰めてみます」

「わかった。他には！ 花屋はどうなった」

「花屋については一向に……」

「明日は、東京に向かつての幹線道路周辺で当たってみろ」

「男の影は！」

「一向にそれらしき人物は浮かんできません」

「被害者の行きつけの美容院を探して当たってみろ」

「はいっ」

高橋警部補の檄がこの会議室に響いたのはこれで何度目だろう。そして毎回のように捜査員達は気も新たに捜査に熱を込める思いで短くも大きな声を揃えてそれに応える。今夜の檄が武井刑事の言葉を意識したものであることを知っている安達刑事の返事はとりわけ大きく壁に響いた。

翌朝から捜査員は改めていくつかの班に分かれ捜査に当たることになった。変質者の取り調べを行う班。

花屋を探す班。美容院を探す班。レンタカー屋を探す班。そして映画館の防犯カメラを武井刑事が、栗岡智樹の身辺調査を安達刑事が行うこととなった。

とりわけ、花屋と美容院については多くの捜査員が割り当てられた。レンタカーについては総務課の職員も動員しての横浜近郊及び品川、東京駅付近と広範囲に電話帳をもとに事件当日前後に掛けて貸し出された赤い車の存在を確認するためにダイヤルを回すこととなった。

「係長、有りました。花屋がありました。川崎の花屋で事件前日夜、店を閉める直前に赤いセダンに乗った男の客が白いトルコ桔梗の花束を買っていったそうです」

「男の特徴は？ 栗岡智樹か？」
「やつと見えかけた光を逃すまいと高橋警部補の目が鋭くも輝く。」

「残念ながら、男の顔まではわからないと……。サングラスとマスクをしていたそうです」

「服装は？ 背格好は？」
「クリーム色のジャケットとジーパンにスニーカー、中肉で百七十センチほどの身長だったとか。それに紺色のキャップをかぶっていたそうです。それと黒っぽい

手袋」

「その客にもう一度会えば分かりそうか？」

「無理だと言っていました。そんな自信はないと。ただ店名がわかるラッピングはしないで欲しい。ラッピングも無地のペーパーでセロテープで止めるだけにとの注文に印象深く覚えてるとのことでした」

「ご苦労さん。良く見つけた」

真犯人に直接結びつくことは今は無い。が、重要な疑問が一つ解明出来たことは大きな成果で有ることに間違いはなかった。

「美容院はどうだった？」

会議室に戻ってきた捜査員に高橋警部補が労いの念を込めて声を掛けた。

「はい、被害者の勤め先の近くにありました」

「それで、何か聞き出せたか」

「店員が言うには、二ヶ月に一度くらいの頻度で来店していたそうです。一年半ほど前に明るい雰囲気に変えたいと微笑みながら鏡の前に腰を降ろしたことがあったそうです。店員が『彼氏が出来たの？』って聞いたのですが嬉しそうな顔をしたもののそれ以上の話には発展しなかったそうです」

「男がいたことが裏付けられたってことか」

「もう一つ、『年齢は?』と、問いかけても笑顔を見せるだけでどんな相手なのか話が弾まないのが最後に『結婚を考えているなら堅い職業の人がいいわよ』と言ったら、『大丈夫公務員だから』と笑って店を出て行ったそうです。それ以後は来店しても男の話には乗ってこなかったそうです。それでも、付き合いは続いているなど感じられたと証言してくれました」

「よおっし、栗岡智樹が相手で間違いなさそうだな」
高橋警部補の声が弾んだ。

「その栗岡智樹ですが、映画館のロビーの防犯カメラで間違いなく映画を見ていたことがわかりました。映画の始まる十五分前にチケットを見せて入り、映画が終わって出てくるのがハッキリと写っていました。つまり殺害されたと思われる十三時から十四時の間スクリーンを見入っていたことになりました」

「じゃあ奴はシロか? 女刑事の勘は大外れか……」
「係長、レンタカーわかりました。見つけました。電話調査で該当したレンタカー屋を片っ端から当たったら八重洲にありました。事件の前日夕方六時に借りて翌々日の夜の閉店間際に返しています」

「それで、借りたのは?」
「はい、栗岡智樹でした」

「おおーっ」

会議室が一斉に湧いた。

「よっし、明日の朝一番で任意同行を掛ける。一気にたたみ込むぞ」

「ちよっと待って下さい。まだアリバイが崩れていません」

「そんなことは後でもいい。何か小細工があるに違いない」

「そうかも知れませんが……。一日だけ待ってくださいませんか? 栗岡智樹は用意周到な男です。動機もハッキリしない中で、アリバイが崩せなければゼロするとも思えません」

「これじゃあ、どっちが係長だか分からんな。わかった一日だけ待ってやるアリバイを崩せ」

「はいっ。必ず」

状況証拠は限りなく栗岡智樹を示している。アリバイが成立するはずがない。武井刑事には確信があった。しかし、同時にアリバイを崩すその手段について見当がつかなかった。

「ところで安達さん栗岡智樹の人となりはどうでした?」

栗岡智樹を任意で取り調べを行うにはより多くの情

報が必要となる。たとえアリバイが崩れても簡単には犯行を認めないであろう。いや、第二のアリバイさえ用意しているかも知れない。栗岡智樹が買った花と現場に散乱していた花が同一とは限らない。赤いレンタカーにしても同じである。レンタカーを借りたことは認めても世の中には何台もの赤いレンタカーは存在する。あり得ないほどの確率ではあっても偶然を主張されればどうすることもできない。被害者と交際をしていたのが栗岡智樹である確証、紐状の凶器と赤いフーダのコートが見つけれ奴のDNAでも発見できれば部屋の搜索令状を取ることができる。被害者の部屋に栗岡智樹の痕跡はなくても奴の部屋に被害者が訪れた痕跡が発見できるかもしれない。しかしそれらは既に処分されているに違いない。隣町のゴミの集積場に犯行直後に放棄していれば既に煙と化している。

それでも、栗岡智樹を追い詰めなければならぬ。そのため奴の全てを知る必要があった。

「栗岡智樹、三十二歳。岐阜市の出身でした。地元の高校を主席で卒業し、H大を卒業してキャリア官僚をめざすも失敗。文科省の内部局、大臣官房政策課に席をおいています。キャリアではなくても精鋭中のなかの精鋭が集まっている部署です。両親は健在。上に兄、

下に妹がいましたが妹は、交通事故で六年ほどまえに亡くなっているそうです。父親は印刷会社の社長の肩書きを持ちながら市議会議員をしているそうです。長男がその跡継ぎのようです。大学の数人の同僚から話を聞くことができました。栗岡智樹本人はキャリア官僚からいずれば国政を担う政界進出を目論んでいたそうです。キャリア試験に落ち、少し回り道になるが後継者のいない国会議員の娘を見つけたらと一度だけです。酒の席で口にしたことがあったそうです。その後は、酒の席での戯れ言ざれごとと笑い、二度と口にするにはなかったとのことでした。気の合う友人も多く男女問わず気さくな付き合いのできる性格のようです。特に親しい女性については聞いたことがないと誰もが口にしていました。国会議員の娘婿を狙っているならば辺は綺麗しておく必要がある。それくらいのこととは当然のように知恵の回る男のようです。仕事も出来、ノンキャリアではあっても定年輪際の課長なら望むこともできるとの評価のようです」

「なるほど、たった一日でよくそこまで。さすが安達さん」

「いえ、岐阜県警の手も借りての報告ですから……」
安達刑事は高橋警部補からの慰労に照れながら口に

した。

「よっし、明日は全員でもう一度、動機に繋がる何かを探してくれ。どんな些細な情報でもいい。同僚、友人、行きつけの店、マンションの住人だけじゃないぞ隣近所も含めてだ。武井、おまえはもう一度防犯カメラの映像をチェックしろ。特に客の出入りだ。客は映画館に入ってから出てくる。出てきてから入ることはあり得ない。いいな」

「頑張ってみます」

武井刑事には高橋警部補が何を言いたいのか理解出来なかった。その結果が頼りない返事となって出た。

次の朝、武井刑事は朝早くに刑事課に出勤した。そして誰もいない机に向かいパソコンに電源を入れた。

「どうした武井、やけに早いじゃないか」

「安達さん？ 安達さんこそこんなに早く……」

「ばか、俺は当直明けだ。今、顔を洗ってきたとこだ」
「そうでしたか、それはご苦労様でした」

武井刑事は事件解決の鍵を握る映画館のロビーに備えられた防犯カメラの映像CDを入れながら覇気の無い口調だった。何かを見つけなければとの意気込みはあったが、その何かがおぼろげでしかなかった。

「丁度いいや、俺はそのコンビニで弁当を買ってく

るから留守番を頼む」

そんな武井刑事を尻目に安達刑事は刑事課を後にした。

八時半を過ぎる頃になると刑事課の捜査員達が次々と顔を出した。捜査は二人以上が一組となって行動をする。予め決められた相手の顔を見るや、挨拶もそこに捜査に出かける者もいればコーヒーを呑みながら打ち合わせに入る者もいる。武井刑事がパソコンの電源を入れてすでに二時間近くになる。

「おはようございます」

高橋警部補が刑事課のドアを開けて入ってくると、一斉に捜査員が声を揃えた。

「おはよう。安達さんの姿が見えないが、もう捜査に出かけたのか？」

「いえ、コンビニに弁当を買いに」

「そうか……。武井、待つのは今日一日だからな。必ずアリバイを崩せ」

「はいっ」

気合を入れての返事を返したものの武井刑事には何らの根拠も自信も無かった。一時間半ほどを掛けて犯行当日の正午から犯行時刻と思われる十四時までの映画館のロビーから入場口を出入りする客の動向を目

を凝らしてみたが特に新しい発見は無かった。栗岡智樹は映画の上映時刻十一時五十分より十五分前に入場口で半券を受け取り、十四時二十分の上映終了時刻の八分過ぎにロビーに出てくるのがハッキリと見て取れた。途中で抜け出すこともなかった。

「そんなはずは無い。何かを見落としている」

武井刑事は小さく自分に言い聞かせるようにつぶやき、最初から見直し始めた。

「どうだ、何か発見できたか？」

安達刑事がコンビニから戻ってきた。

「安達さんー。まだ何も。この映像は栗岡智樹のアリバイを完全に肯定しています」

「ちゃんと見たのか？ 係長の言っていることを気にして見たのか？」

「えっ、どういうことですか？」

「何だ、武井。本気でアリバイを崩す気があるのか」

「……」

高橋警部補の言わんとしている意味が理解できていない武井刑事には返す言葉がなかった。

「この映像からアリバイを崩す手掛かりはただ一つ。

真犯人が栗岡智樹なら映画の途中で抜け出すしかない。非常口も有るが観客が自分で開けるのはまず不可能な

ことはわかっていいる。なら、カメラの目をごまかして出るしかない。そして再び入らなければ何気なく出てくるところをカメラに捉えさせることは出来ない。係長が言っているのはそう言うことだ」

「客は映画館に入ってから出てくると言うことはそういう意味なのか」

武井刑事の胸の内に光明が射した思いだった。入っていないのに出てきた観客を探す。その観客が再び入るのを確認する。それはまさしく栗岡智樹が変装をして抜けだし何食わぬ顔で再び入って堂々と出てくる。

「どうやら理解ができたようだ。俺は俺なりに動機について探ってみる。がんばれよ」

「はいっ」

手空きの捜査員など誰もいない。それでも安達刑事は部屋に残っていた若い刑事を強引に引き連れて聞き込みに出かけた。武井刑事はもう一度、栗岡智樹が半券を受け取ってからロビーに出てくるまでに入入りした観客の服装を一人一人念入りにチェックして一覧にした。上映をしている観覧室は八部屋もある。当然のようにそれぞれが上映開始時間も違えば終了時間も違う。限られた時間帯での映像であれば出てくるだけで再び入らない客もいれば、入るだけの客もいる。チェ

ックをする対象だけでも数百人にはなる。

「いたつ。十二時九分に出て十四時八分に入った。帽子を被った白いジャケットの男。意識してカメラを避けているかのようにうつぶきながら前を通っているようにも見える。きつと栗岡智樹に違いない。映画館からマンションまで車なら四十五分ほど、犯行に十五分。二時間もあれば充分に行つて戻つてこられる」

武井刑事は、部屋を飛び出して映画館へと向かった。「すみません。四月三日の十二時過ぎからの潜水艦の映画を観た人はわかりますか？ 現金でチケットを購入した人はともかくカードで購入したとか会員の方なら記録に残ると思うのですが」

武井刑事は、映画館の支配人を捕まえて警察手帳を見せながら口にした。

「わかりました。四月三日ですね。購入記録はデータ化して集計して残すようにしていますので少しお待ち下さい」

支配人は事務所の奥へと入つて行つた。

「お待たせしました。その時間帯の『潜航深度の攻防』での観客の氏名がわかるのは三十名ほどですね」

「その中に、栗岡智樹はいますか？」

「はい、いらつしやいます」

「座席番号は？」

「J82ですね」

「その隣、いや一番近い席での観客は？」

「栗岡様の席の前後隣付近で六名いらつしやいます。内、一名は当館の会員の方ですので連絡先もわかりませんが……個人情報ですのでお見せするわけには……」

「その方の席は？」

「真後ろのK82ですね」

「令状を取る時間がありませんので、上司からお願いさせて頂きます」

武井刑事は携帯を取り出し、高橋警部補を呼び出すことにした。

「わかりました。この部分だけをコピーしてきます」

支配人は武井刑事の行動を遮るかのように事務所の奥へと戻つた。武井刑事は高橋警部補に連絡すること無く携帯をポケットへと収めた。支配人は、奥から戻るとコピーした会員名簿を武井刑事に差し出した。

「ありがとうございます」

武井刑事は深々と頭を下げ、とつて返すかのように映画館を飛び出した。

事件が起きて既に一ヶ月半が過ぎた。停滞していた捜査もここに至りてようやく先が見えてきたような気が

する。活気に満ちた捜査会議とはほど遠く、成果らしい報告も無く捜査員のだれもが苛立ちを見せていたのが昨日から大きく変わった。二人の容疑者に絞られ、変質者の方については今日も厳しい取り調べが行われているはずである。今回の事件に関わりは無いにしても必ず何かをやらかしている。だから激しく抵抗して逃げようとしたに違いない。栗岡智樹についてもアリバイは崩れた。後ろの席、K82で映画を観ていた男性客は、「前には誰もいませんでしたよ」と、証言してくれた。あの帽子を被った白いジャケットの男は栗岡智樹が変装をして出てきたのに間違いないとの確信を武井刑事は持った。

「ひよっとして」

横浜中央署の刑事課に戻った武井刑事は帰りの電車の中で浮かんだ思いを確かめるべくすぐさまパソコンを二台並べて開き、トルコ桔梗の花束を抱えた赤いフードの女の？の映像と映画館のロビーに写る栗岡智樹の映像と変装と思われる男の映像を見比べた。

「やつぱり」

武井刑事の声は高橋警部補のところまで届いた。

「どうした、武井？」

「先ずはご報告が」

武井刑事は、映像から不自然な出入りをした男が一人いたこと。上映中、栗岡智樹が購入した席には誰も座っていないかったとの証言が得られたことを報告した。「良くやった。これで自宅捜索がやれる。それで被害者の痕跡が出れば事件は解決に向かって一気に進む」

「高橋警部補、これを見て下さい。この三人の足下。いずれも白いスニーカーを履いています。同じバンズのスニーカーです。栗岡智樹の部屋にこれがあれば大きな裏付けになります」

「バンズ？」

「スニーカーの有名ブランドです」

「わかった。もうすぐ捜査会議を始める。他の捜査員にもう一度報告できるように準備しろ」

「はいっ」

「元気が良いじゃないか、何か発見できたのか？」

安達刑事が、捜査会議に間に合うようにと急いで階段を駆け上がったのか息が切れている。

「はい。安達さんのおかげです。アリバイを崩すことができました」

「そうか。武井の粘り勝ちだな」

「ありがとうございます」

「俺の方も、動機に繋がる新しい情報が得られた」

ほどなくして捜査会議が始まった。

「諸君、ご苦労さん。諸君の地道な捜査が実を結ぼうとしている。二人の容疑者のうち、変質者については取り調べの結果、別の事件の本ボシとして北署に引き渡した。栗岡智樹については明日の朝一番で本人立ち会いのもと自宅捜査をする。奴の犯行に繋がると思われるものはどんな微細なものでもいい発見次第押収する。その上で任意同行を掛ける。取り調べの中で言い逃れできないところまで追いつめ！間違ひなく奴が真犯人だ」

刑事課々長の高瀬警部が、やつとここまできたかと興奮しているかのように見える。

「いま、課長から話があったように明日の朝一番でガサ入れをする。捜査会議は今日が最後だ。次に諸君が一堂に会する時は美酒を手にする時だ。最後の捜査報告を聞こう！」

高瀬警部の興奮が高橋警部補に感染したかのように声が弾んでいる。そしてさらにそれは捜査員達にも広がり捜査会議室の空気さえも弾んでいた。

「動機についてだが、栗岡智樹に婿養子の話がまとまり掛けていることが判明した。相手は岐阜一区選出の衆議院議員大友源一郎の長女だ。結婚と同時に秘書と

なり、十年後には跡目を継ぐという路線だ。当然のように被害者宮原美保は邪魔な存在になる。これが動機だ」

「よっし、次！」

安達刑事が動機について報告を終えると高橋警部補は同調するかのように声を張り上げ、さらなる裏付けを求めた。

「栗岡智樹のアリバイですが、犯行時刻は映画を観ていたとのことですが、これを見て下さい」

武井刑事は、正面の大型液晶画面に会議室に集まっている全員に目をむけるべく促した。

「ご覧のように、栗岡智樹が半券を手にしてから大勢の観客が出てきますがこれらは他の上映室から出てきた観客です。が、一人だけ栗岡智樹が映画を観ていたという時間帯に再び入場する人物がいました。当然、映画は観るために入り、観終って出る。しかし、この人物は出てから入るといふ不自然な行動をしています。栗岡智樹がアリバイを主張するために映画館の防犯カメラを利用したのではないのでしょうか。そして変装して出てくる。犯行後再び中に入り、上映終了時刻に何食わぬ顔で出てきたところを再び防犯カメラにその姿をさらす。いまひとつ、栗岡智樹が購入した座席番号

はJ82だとわかりました。その真後ろ、K82を購入した観客が判明し、栗岡智樹が購入した座席は誰も座っていないかったとの証言が取れています。それともう一つ、白いトルコ桔梗の花束を持った赤いフードの女と思われる足下の靴ですが白いスニーカーはバンズというブランドの靴とおわれます。映画館での栗岡智樹、変装した栗岡智樹と思われる男の足下も白いバンズのスニーカーです。栗岡智樹は間違いなく真犯人だと確信します」

「赤いレンタカーですが、Nシステムで探したところ犯行当日の十二時二十一分、関内で捕らえることができました。確かに赤いフードを着ていましたが人物までは……。それとレンタカーについては車内清掃が何度も行われ何の痕跡も発見出来ておりません」

「わかった。いいか、栗岡智樹は犯行当日の前夜、花屋で白いトルコ桔梗の花束を購入し、映画館近くの駐車場に止めたレンタカーの中に入れて、交通機関を使って帰宅。翌日、十時すぎ自宅を出て関内に出かけ映画館に入り、変装をして映画館を出てレンタカーに乗り込む。予め赤いフードのコートも車の中に置いていたのだろう。車内で着替え、マンションに向かい宮原美保を殺害。再び映画館にもどり何食わぬ顔で帰宅。

今となつては凶器と赤いフードのコートの発見は難しいと思う。とつくに処分しているだろう。明日の家宅捜査で二人の関係に結びつく物証を見つかる。スニーカーもだ。必ず何か出てくるはずだ」

「なんだ、何か他に新事実があるのか？」
高橋警部補の力の入った檄に、恐縮するかのように入人の若い捜査員が手を挙げた。

「栗岡智樹の部屋なのですが、近所の聞き込みで二度もハウスクリーニングが行われたそうです。しかもわざわざ違う業者に……。それとベッドと寝具も新品に、古いものは下取りに出したそうです」

「その購入先はわかっているのか？」

「はい、搬入トラックに大きくロゴが入っていたので」
「なぜ、それを早く報告しないか。鑑識班は明日その店にも何人かを回せ、寝具から何らかの痕跡が出るかもしれない。栗岡智樹はそれを恐れたから新品に入れ替えたに違いない。クリーニングされた奴の部屋からは厳しくても寝具が残っていれば何かが出る」

「高橋警部補、自分は明日、近所のクリーニング屋を当たりたいのですが」

武井刑事が再び女の勘を働かせた。

「クリーニング屋？」

「はい。今日の会議を聞いていてふと思いついたので、被害者はこれまで天涯孤独といつてもいいくらいでした。栗岡智樹と関係したことで家族と呼べる人が出来たことに人一倍喜びを持ったと思います。しかし栗岡智樹からは固く口止めをされ、関係が壊れるのを恐れて誰にもこの喜びを口にできないのもまた苦しものだったと想像します。白いトルコ桔梗の花言葉は『すがすがしい美しさと深い思いやり』です。赤いフードに女装した栗岡智樹を何の疑いも持たずに招き入れた宮原美保の女心を察するに余りあります。栗岡智樹はノンキャリアとはいえ官僚です。白いワイシャツを毎日着用しています。クリーニング屋に自分で出しているのか宮原美保が出しているのかを確認したいのです。宮原美保が出していたのなら栗岡美保として顧客名簿に書いている可能性があるような気がするのです」

武井刑事は、宮原美保の心情を思いやった。二人の関係をひた隠しにすることでしか維持が出来ていない。栗岡智樹は甘い言葉で宮原美保の心をつかむと同時に長くは続かない。いや、続けてはならない。政界に打って出るには何ら役に立つ女ではない。束の間の癒やしと、性欲を満たすための女としか見ていなかったと

思われる。しかし、宮原美保にしてみれば、やっと目の前に家族と呼ぶ存在となりうる栗岡智樹に巡り会ったと思ったに違いない。新妻のごとく純真に立ち振る舞いながら、なぜ秘密にしなければならぬのかなどと疑問に思うことを避けていたに違いない。栗岡美保と書くことができる場所を見つけるとすれば毎日栗岡智樹が身につける白いワイシャツとクリーニング屋に求めても何ら不思議はないと武井刑事は考えた。「わかった。家宅捜査でワイシャツを真っ先に確認しろ。店名が記してあるはずだ」

「それと……」

「なんだ、武井。言いたいことがあるなら言ってみろ」
「はい、家宅捜査の際には台所用品だとか洗剤、調味料の入れ物、洗濯物を干す竿やピンチなら以外と宮原美保の痕跡が残っているような気がします」

ドアや壁、家具類など全ての物が業者によって丁寧に清掃されたに違いない。しかも、一週間の間において違う業者に再依頼をした栗岡智樹。完全に宮原美保の痕跡を無くしたいと思ったにちがいない。そしてそれはパーフェクトに行われたに違いない。それでも不安を抱いた栗岡智樹は、調度品を入れ替えるといった大技にも出た。男の栗岡智樹が考えるパーフェクトは

女の武井刑事が思いつく宮原美保の心情まではカバーすることなどできないのではと思った。

「できました。洗濯ピンチから宮原美保の指紋が！」
鑑識班の一声で栗岡智樹は半ば強制的に横浜中央署の取り調べ室へとむかうことになった。

マンションからの最寄りの駅までには二軒のクリーニング屋があり、栗岡智樹のワイシャツのビニール袋も二種類があった。

「栗岡さんね、お得意様ですよ。ほら、殺人事件のあったリバーサイド有園。あのマンションにお住まいですよね。一年半位前から週に一度、五枚の白いワイシャツを中心に。既製品じゃなくてネーム入の仕立てのワイシャツだから気を使ったわ。きつとエリートね。でもそういうえばこのところ奥様はいらして居ないわね。仕上がったワイシャツを取りにいらして以来」

武井刑事の思った通りだった。唯一、私は栗岡智樹と家族なんだと叫ぶ場所をこのクリーニング屋に宮原美保は求めたにちがいない。

「栗岡さんね。一年以上前かな、うちによく出して頂いていたのがバツタリ、それがこの一ヶ月前ほどからまた出していただけのようになってます」

もう一方のクリーニング屋は宮原美保の存在を知ら

なかった。栗岡智樹にしてみれば、宮原美保が利用していたクリーニング屋を使うわけには行かなかったに違いない。何かを聞かれれば受け答えに困る。だから変えるしかなかった。それだけのことだったに違いない。

洗濯ピンチから宮原美保の指紋が採取され、バンズの白いスニーカーも押収された。業者が引き取ったベツドからは宮原美保の髪の毛が押収された。花屋の証言。映画館での後ろの座席の観客の証言も合わせれば状況証拠としてはこれ以上のものはない。物証としての凶器の紐状の物も赤いフードのコートも処分されてしまっている。しかし、栗岡智樹が逃げおおせるはずもない。

「武井巡査、次の昇級試験は必ず受ける。おれが署長に推薦状を書くように掛け合つてやる。高瀬課長との連名でな」

栗岡智樹はあっさりと犯行を認めた。上機嫌の高橋警部補が刑事課の外にまで聞こえるような大きな声を張り上げた。

了

「恭子？ 私。彩海は？」

押木由起子は、推理小説『白いトルコ桔梗の花束を持った赤いフードの女』を書き終えるとすぐさま娘のところに電話を掛けた。

「おかあさん？ 彩海はまだ学校から帰っていないけど」

「あらそうなの。部活なの？ それとも塾に寄っているの？」

「おかあさん、彩海はこの春から大学生よ。忘れたの？」

「そうだったわね。私にはいつまでたつても小学生も同じよ」

「彩海が聞いたら怒るわよ。それより元気？ 躰の調子は？ 独りで淋しくはないの？ こっちに越してきてもいいのよ」

「ありがとう。私は大丈夫よ。ボーイフレンドもいっぱいいるし楽しくやっているわ」

「そう。それで彩海に何の用事なの？」

「帰ったら電話するように伝えて。書き終わったからいつ来られるかって」

「わかったわ。同人誌ができたらまた送ってね。月が変わったらまた顔を出すわ」

推理小説が書き終わり推敲も済ませた。来月発行さ

れる同人誌は、創刊から数えて百号の記念号になる。

由起子には小説を書き終えるたびに早く誰かに読んでももらいたい症候群の癖がある。年齢の割には躰はいつたつて健康ではあつても癖だけは厄介さを増している。その点、彩海は良き理解者であり良き批評家でもある。感想というよりは評を聞いて筆を入れ直す箇所を見つけ出すには絶好の相手である。もつともそれにはブラン・シャポールのショートケーキ二個と幾ばくかの小遣いを用意する必要があつた。

完